
ヴァルキリー家の娘事情

田浪亜紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァルキリー家の娘事情

【Nコード】

N4263Z

【作者名】

田浪亜紀

【あらすじ】

主人公、多田野辰巳は暑さが始まったある日、玄関先で金髪の少女、セラフィーナ・ヴァルキリーと出会った。その後、辰巳はセラフィにあれこれ巻き込まれイギリスに行くことに。そこでは世界を揺るがす大事件が待っていた。

とある少年の惨劇

時は今から二十年ほど遡る。

とある少年がまだ幼い頃のことだった。

ここはイギリス某所に存在するスラム。

まだ七歳にも関わらず、少年はここで生活をしていた。親はもう他界していた。

少年が生活している環境は決していいとは言えない。見渡すと、あちらこちらに汚水が垂れ流しにされ、無惨にも捨てられた生ゴミが異臭を放っていた。ちらほら見える人影も、元気で活発には見えない。表情は俯いていて暗い。

少年はここで孤独に生活していた。裕福　とはいいがたいが、まあなんとか明日生きるための命は繋げられていた。

そして、少年には夢があった。「絶対にここを綺麗にしてみせる」という夢が。こんな地獄みたいな場所で、純粋な気持ちを持つていられるのは、少年の心が綺麗だという証拠だろう。

毎日毎日必死にスラム一帯のゴミを拾っていた。食事はゴミに紛れている残り物やリンゴ。それでもまだいいほうだった。酷い日は何も見つからなかった。飲まず食わずの日が続くことさえあった。一度、汚水を口に運んでしまったことがあった。その時は生死の境目をさまようほどの高熱を発した。それでも少年は、食事ができない日があっても、ゴミ拾いは止めなかった。ここを綺麗にしたい、という気持ちだけが、少年を動かす原動力となっていた。

そして、その夢が叶うときがやってきたのだった。

ここに工場が建設されるとのことだった。

最初は純粹にうれしかった。ここがただ汚いだけの、何の役にも立たずに放置されているのが嫌だった。それは少年にとっては吉報だった。

工場の建設が始まった。希望するものは工場建設の下働きができ

た。もちろん、少年も参加した。

月給五万円。

決して多くはない額だが、今までお金さえ得られなかった彼らにとつてはまるで財宝を手にしたかのような感覚だった。他の労働者はそれを娯楽や服、食べ物に大いに使った。だが少年は違った。生きていくために必要最低限の食にしか使わなかった。年頃の男の子がしそうな、欲しそうなものにも使わない。ただ余った分は貯めた。

しかし、この都合のいい給料の給付はそう長くは続かなかった否、続くに続くが、それは労働者本人の体次第であった。

工場側の労働者の扱い方が劣化していったのだ。休息の時も与えず、水も与えず、ただひたすら労働。日本で考えたら労働基準法を破る働かせ方。

それが数カ月に渡って続いた。

そして少年は八歳になった。この年は普通に考えたら小学校二年生くらいだ。それでも、長きに渡って働き続けていた。死人だつて出ている。その中で、八歳の少年が働いている。それはもう化け物じみていた。

だが、労働者たちも黙っていなかった。

遂にストライキが起きた。

無論、少年も参加していた。

しかし、それを工場側の人間たちは武力によって鎮圧させた。そして言った。「もう抜けられると思うなよ。私たちに逆らったら命はない。もうすでに貴様らの命は私の手の中だ」と。

このまま完成するまで働いてもらう、と付け足した。

もう自由はない。異様に、その言葉が少年を傷つけた。

では、これから何を生き甲斐にして生きていけばいいんだろう？

憂鬱だった。

死にたくもなかった。

だがそこで、ある感情が少年を支配した。

そうだ。だったらあいつら全員殺っちゃえばいいんだ。こんなことを平気でやってのけるあいつらをみんな殺っちゃえばいいんだ。

負の感情。それが少年の心を支配した正体。

まだ幼いうぶな少年の心を邪悪な感情が支配した。

少年は逃げ出した。

汚い道を一心不乱に走った。

かといって、その目的は簡単に達成できるものではなかった。当然、少年もそのことくらいは分かっていた。だからこそ、逃げ出すという選択肢を選んだのだった。

案の定、懐には日本円にして三十万円というお金が貯金として残っていた。今まで少年がコツコツと貯めてきたお金だ。

少年は逃げ切れた。

その後、少年はそのお金でありとあらゆる学問を学んだ。血眼になつて。

数年後、少年は『魔法』という領域にたどり着いた。

不思議との出会い

ある人は言った。

この世には不思議が満ち、溢れていると。

そう、この町にも不思議があった。

「行つてきまーす」

ただのたつみ
多田野辰巳は家から飛び出した。

これといって特別な行事はないものの、なんとなくテンションマックスだった。

ニコニコとした笑顔を気持ちが悪いくらいに顔に浮かべた辰巳は、唐突に足を止めた。

「・・・・・・、は？」

理由は簡単だった。目の前に何かがあったからだった。

突然の出来事に、呆然とする辰巳。これしか言葉が出てこなかった。玄関の前に何かがあったにならまあ仕方がないだろう。

当初、この玄関先にあるものが何かさえ分からなかった。宅配便の荷物かと思い、恐る恐る回り込みながら、観察していると、顔があった。

「えーと、・・・・・・？」

なかなか声がでない。

顔から察するに、年は十四くらいで、髪は金塊を連想させるほど綺麗な金髪。顔立ちはやや幼さを残している。格好はおかしかった。漆黒色の鎧 いや、これは甲冑と言った方がいいのだろう。少女はそれを胸、腕、腰、脚といった優先的な個所にしか服と言えるものを着てはいなかった。

もしかして、漫画とかでよく見かける異世界から落ちてきた的なシュチュエーションかな？ と考えを出してみたが、それはないない、と頭の中で辰巳は振り払った。

「・・・・・・・・」

しばらく考え、頭のなかを整理していると、

「水、が・・・・・・・・欲しい」

と、少女らしき声が辰巳の耳に、入ってきた。

頭に疑問符を浮かべていると、また、声がした。

辰巳はぎこちない動きで正面に置いていた視線を、下にいる少女に向けた。

「水・・・・・・・・」

思わず一歩後ずさってしまう。辰巳はなんとかその場に踏みとどまる。

「み、水か？」

尋ねると、少女は地面に寝ている首を少しだけ動かし、相槌を打った。

辰巳は大至急水を少女に渡すため、台所に向かった。持ってくる途中、辰巳の母である玲奈から質問攻めにあつたが、それをささつとかわし、その場を乗りきった。

水を持つてくると、少女は上体だけを起こし、頭を擦っていた。

「つつー」という声と共に、瞋っていた目が開かれた。目は透き通っていると思わせてしまうほど綺麗な碧眼の持ち主だった。

辰巳は可愛いな、と思いながら、手に水の入ったコップを持ちながら、少女に近づいた。

「誰だ貴様は。それと、その吐き気がする顔でじろじろ見られると、こちらとしては吐き気に見舞われるのだが？」

先程、水を求めた少年　辰巳に、少女は言った。

「悪かったな、気持ちが悪くて吐き気を催してしまう顔で」
しかし辰巳はそれを軽くあしらった。

「なんだ、先程の少年は貴様だったのか。なんだかすまないな」

辰巳は持ってきた水を少女に渡すと、それを少女はそれを一気に飲み干した。あつという間に空になったコップを手に少女は言った。
「ご飯などもいただけると有難いんだが・・・・・・・・」

ずっずっしいやつちなあ、と辰巳は考えるも、さすがにこんな少女を見捨てるわけにもいかず、母である玲奈がいる台所へと足を運んだ。

事情を玲奈に説明すると、「それは大変、早く連れていらっしやい」と快く承諾してくれた。

外に出て、許可が出たことを言い、出てみると、「足が動かないからおんぶをしていけ」とご命令。渋々おんぶをすると、微風が吹いて、少女の金色の髪が辰巳の目の前に現れた。

（な　！？　なんだこいつ、髪からいい匂いが！）
そう思いながらも、辰巳は頭を思いっきり振り、邪念を振り払った。

たこうしているだけでは先程のことが脳裏を過ってしまうので、話題を切り出した。

「あの　」

「何だ？　くだらんことで、時間を浪費するなよ？」

酷い言われかただな、と肩を落としながらも続けた。

「重いつすね」

この時辰巳はきつとこの少女が身に付けている甲冑のことを言ったのだから、どうやら少女はそうではなかったらしい。その証拠に、顔を地平線へと沈む夕日のように真っ赤に染めていた。少女は小刻みに震えていた。

「　て悪かったな」

「・・・・・・、へ？」

「重くて悪かったなと言っているんだ！！」

「ば、バカ！　こんなトコで暴れんじゃ　　おわああああっ！？」

ドスン、という音と共に倒れた二人。

「つつててー」

前に倒れ、前頭部を打った辰巳は、そこを擦りながら起き上がるうと腕を支えにした。だが、立ち上がれない。疑問に思い、首だけ動かし辺りを見渡した。

そして辰巳の後ろに馬乗り状態の例の少女がいた。

少女は目を瞑ったまま頭を擦っていて、現在の状況を知っていないようだった。

少女はしばらくし、頭を擦るのをやめた。と同時に開いた目を真ん丸く見開いた。

「な………ッ、何をしているのだ貴様は!!」

言いながら、ガバツとその場から勢いよく立ち上がった。

「この」「右拳を握りしめ、「破廉恥野郎が!!」」

渾身の右ストレート（漆黒色の鋼鉄製ガントレット付属）が辰巳の後頭部に炸裂した。

鈍い音が辰巳を襲った。思いのほか痛くなかったのは辰巳にとってはラッキーであった。

だがここで、痛くないと言ってしまったら面倒なことに巻き込まれそうな気がした辰巳は、瞬時に演技を開始した。その間わずかコンマ一秒。

「痛っ！ 何しやがんだ!!」

もう一度言っておこう、これは演技である。

少女は腰に備え付けていた鞘から剣を抜き出した。それを辰巳の顔に突き付ける。

グレードソード。

平均的長さは百から百八十センチメートルほどで、この剣も百センチほどの大きさだ。それでも少女との不釣り合いさは変わらない。使い方は剣というよりも、槍として使われることが多い。

それを、少女の華奢な腕で持ち上げている。

「お、おい!? 何だその剣は！ 待て不可抗力だ!! たかが人の上にのっかつちまったただけだろ？ なのに」

ズササササ、と綺麗に地面にお尻を着けながら、後ろへ後退した。

「黙れ」

少女は威圧感のある声で続けた。

「戯言を申すな！ どんな理由であれ、この私に屈辱を抱かせてし

まったことを後悔するんだな」

そしてまた少し、剣先を突き付け、辰巳との距離をさらに縮めた。
「ちよ、待てよお前。つかお前今表情無いぞ！？ いいから落ち着けよ。まずはその剣で俺を団子四兄弟状態にすることをやめろ！」
それでも少女は止めようとはしなかった。

「ふん。せいぜい神へでも懺悔するんだな。まあ貴様はそんなことをしている感じには見えんが……」

「何言ってるんだよお前……、分かった！」

剣を先目の前に突き付けられて状態で、辰巳は言った。

「お前、腹減ってるからそんなに怒ってるんだろ？」

「ち、違うわ……！」

少女は突き付けていた剣を上へと掲げた。途端、その剣が微かに蒼白く輝き光始めた。

「我、汝と契約を交わし、我魂を代償として授けた。その見返りとして、汝の力を我に分け与えよ！ 魔導詠唱第二十六章『ウィル・オー・ウィスプの輝き』！」

言い終えた時だった。剣全体で光っていた光が剣先に集中し始めていき、一点に集まり 留まった。

「思い知れ……！」

辰巳は腕で顔を庇った。それに対して少女は何もすることなくそのままの構えでいた。

刹那。

剣先に留まっていた蒼白い光が一筋の光線となって辰巳に襲いかかった。

説明

「ッ!？」

同時に、歯を食いしばった辰巳。

しかし痛みは無かった。

あるのはただ無情にも流れすぎていく時間のみ。辰巳は思いきって目を開けた。

そこには

「なぜ、なぜ当たっていない………?」

驚いている少女だけだった。

辰巳は疑問に思った。

(何が………?)

思わず辺りを見渡した。何も変わっていない。ただし、その中にただ一つだけ異常な箇所が目飛び込んできた。それはタイルが黒く焦げていた。

「ッ!？」

直感だけで十分だった。

コイツは普通じゃない。

格好だけでそう思えるものの、もっと別の意味で、辰巳はそう考えた。

「チッ、まあいい。それよりも、ご飯を貰えるか? 先程の行為でお腹がさらに減ってしまった」

少女は掲げていた剣を鞘に戻すと、何事もなかったかのような表情になった。

辰巳は今すぐぶざけんじゃねえ、の一言くらい言いたかった。だが今そんなことを言ったとしたら命を落とし兼ねない。

つまり。

今ここではこの少女には逆らわない方がいいということを辰巳は結論付けた。

そういうことで、台所までの案内を再会することになった。少女は自力で立っていたため、そのまま案内した。

台所は玄関を入って真っ直ぐ進んだ突き当たりの部屋にあった。そこには四人がけのテーブルがあった。

どうやらもうすでに玲奈が朝食の残り物を使って調理をしていた。髪は肩甲骨辺りまで伸ばしているロングヘアで、少し黒に茶髪が混じっているといった感じの髪を持った女性だった。

「母さん、連れてきたけど」

背後にいる少女を警戒しながら、辰巳は聞いた。

「そう。じゃあ適当に腰を下ろしていてちょうだい」

玲奈は包丁を見たままだった。

「ではお言葉に甘えて」

少女はイスに腰掛けた。辰巳もそれに習う。

さすがにこんな得体の知れない少女を玲奈と二人きりでいさせることは辰巳にはできなかった。幸運なことに、学校までは時間があつた。だから、辰巳は家に残るという選択肢を選んだのだった。

しばらくすると、料理を持った玲奈は大和撫子を連想させる顔立ちに、明るい笑顔を浮かべながら、辰巳たちがいるテーブルへと運んできた。それを辰巳は受け取ると、恐る恐るそれを少女の前へと差し出した。

「ごめんね、こんなものしかなくて……」

少し困った顔になった。

（いやそれはないぞ母さん。こんな得体の知れない少女に飯を出してやるだけでも十分すばらしいことだ）

辰巳がそう思っていると、少女が玲奈に礼を言った。

「いえいえ、そんあ。戴けるだけで十分です」

少女の目は少し輝いていた。

玲奈は辰巳の隣に席を取った。

「（どうしてあんなやつに疑問もなくあげられるんだよ）」

静かに、少女には聞こえないように辰巳は母である玲奈に聞いた。

少女は野菜炒めに箸を運んでいる。

玲奈は言った。

「（あら、あなたがここに連れてきたからよ。それ以外に理由なんである？）」

その返答に、辰巳は戸惑った。

確かに、連れてきたのは俺だけど、実際は無理矢理に近いような・
・・・・。

はあ、と溜め息を吐いた。

警戒の視線を謎の少女には向けながら、辰巳は思いきって疑問をぶつけた。

「そつえば、名前は何て言うの？」

味噌汁を飲んでいた少女は唐突にその動作を中断し、

「名前か？ 名前ならコロスーゾ」ヴァルキリーだが？」

その時、辰巳の脳内で危険信号を発していた。

（あれ？ 今なんか不慣れた単語を聞き取ったような。別の国ではそういう発音なのかな？）

内心汗だくの辰巳に、少女は言った。

「あ、いや失敬。すまんが先程のは間違ってしまった。正しくはセラフィーナ」ヴァルキリーだ。まあ長いからセラフィとでも読んでくれれば構わない。こちらはそんなこと気にしてはいないからな」
間違えるな！！ と辰巳はツツコミ、名前に関する疑問は消えたのであった。

しかしまだ疑問はあった。大きな疑問が。気が付けば当たり前だと思ってしまうほどの疑問が。

少女は飲みかけであった味噌汁を再び口に運んでいた。

辰巳は頭をフル回転させる 必要はなかった。そう、服装だ。この奇想天外な服装を疑問に思わない人はいないだろう。

漆黒の甲冑を胸、腕、腰、脚といった重要な箇所のみ装備しており、そのため、肌が露出している範囲もただではすまなかった。これは誰もが疑問に思うことだろう。

「それでセラフィさん、でいいんだっけ？」

「いや、呼び捨てで構わない」

辰巳は動かしかけていた口を一旦止めた。言いにくい。それが本音だった。辰巳はこれから何でそんな格好してんだ？ と聞こうとしていたのだが、言えるわけがなかった。言える方がおかしい。無神経というやつだ。

「じゃあセラフィ」

辰巳は勇気を振り絞って、

「何でそんな格好なんだ？」

その質問に、セラフィは冷静に答えた。

「何だ？ その程度のことが。私はてつきり貴様が私を変な目で見ているの辺のいやらしいホテルにでも連れていくための口実でも言うんではないかと心配したんだが」

セラフィが言った瞬間だった。突然、玲奈の辰巳を見る目が氷のごとく冷たくなった。

「そして」

「分かった。分かったからもうやめて！ 俺が聞きたかったことはそんなちんけなものですから！！」

泣きつく辰巳。明らかに一方的にさせられている。

「そうか、ならやめてやろう」

言っと、セラフィはもうすでにすべての料理を完食していた。

「確か、この服装についてだったな」

最後に、お茶を飲み終え、ようやく辰巳の質問に着手した。

「これはその……別に私の趣味でこうなったわけではない。これは英国騎士団の戦闘服と言うべきものだろう。ただ、その英国騎士団の団長がこういう特殊な趣味をお持ちであって、決して私の趣味から生まれたものではない！！」

顔をリングのように真っ赤にさせて、セラフィは言った。

「てか、英国騎士団ってなんだ？」

辰巳の質問に、セラフィは呼吸を落ち着かせてから回答した。

「ふむ、英国騎士団というのは、主に世界のバランス　つまり平和を乱す輩を世界の裏側で暗躍する組織であって、その行動範囲は全世界に上る。そのため、世界には様々なパイプを築き上げて来た。まあ大雑把に何をしているかというところ、こんなものだ」

「裏でって、警察みたいなもんか？　例えるなら『CIA』とか『FBI』とかそういう感じの　」

まあそんなの当たり前か、と思っていた辰巳であったが、セラフイの回答は違った。

表情を明るくし、いかにも自信ありげな表情を取った。

「ふん、そんなちっぽけな組織と一緒にされてもらっては困るな。その組織は一定の範囲内と権限しかもっていないだろう？」

（！　言っちゃったよこの子！　全世界で頑張って活動している『CIA』と『FBI』の人たちを否定した！！）

心の中で絶叫している辰巳。

しかし、そんなことも知らずに、今度は表情を少し暗くしてセラフイは語りだした。

「そこでなんだ。この頃妙な組織が現れてな。大抵のことならすぐにかたをつかせることが出来る我々の組織が苦労している。これは前代未聞の出来事だ。私はその組織については知らない。私は下端要員だから」

妙な組織。英国騎士団という巨大な組織さえも苦労している、という組織が現れた。そんなことを言われても、辰巳は信用できるはずがなかった。

それでも、辰巳はその真偽を探るため、言った。

「じゃあお前は、そのすげー組織を追ってここまでやって来たのか？」

「いや、そうであるのだが　」

いきなり言葉を濁らせた。構わず辰巳は続けた。

「つてことはお前がさっき玄関前に倒れていたのって……まさか！」

つまりこういうことだった。

朝何時までは定かではないが　朝かも分らない　まず、セラフィが襲われたとすると、ここ近辺ということになるだろう。さすがに襲われてからの状態で、何キロも歩くことは難しい。となる　やはり、襲撃されたのはここ近辺ということでもまず間違いはないだろう。

つまり、

まだこの近くにその組織の要員がいるかもしれないということだ。しかし、襲撃されたといっても、その当人であるセラフィにはどこにも外傷らしき傷や怪我が見当たらなかった。

「いや、確かに。襲われたとするなら貴様が思ったかもしれないことで、解釈することは可能だ。だが違う」

セラフィは辰巳の考えていたであろうことを否定し、目に光を宿した。

「私は英国騎士団から給付された今月の金をすべて使い果たし、拳銃の果て今月の食費をすべてなくしてしまったのだよッ!!」

（ようは調子こいて遊び過ぎたってことか・・・・・・）

と、辰巳が思った途端だった。

「まあそういうことだな」

辰巳は口を開いていないのに、セラフィがまるで辰巳の心を読み取ったかのような回答だった。

玲奈は「何でこの子は独り言を言ったんだろう」といった感じの表情になっていた。辰巳頭の中も疑問符でいっぱいだった。

（つーか今俺の心の中読んだ？　でも、そんなことが本当におこんのか？　もしかすると、偶然口に出してしまった言葉が俺が思ったことと重なっただけかもしれないし・・・・・・）

「それはない。確かに私は貴様の心の中を読んだ」

即答だった。

セラフィは腕を組んで、辰巳に視線を据えた。

「まあこれは私たちにとってはごくごく当たり前の技術だ。そんな

に驚くことはない」

（当たり前前ってそんな……）

思わず顔を苦くする。

「え？　ちよつとどうしたの、たっちゃん？　さっきから少し顔色が悪いわよ？」

たっちゃんとは家族内の愛称的なものだろう。そこに、嫌味度マックスの表情になったセラフィが会話に入り込んできた。

「ふん」

鼻で笑った。

嫌な奴だ、と辰巳は思った。顔を真っ赤にさせた。セラフィはそれでも追撃をやめなかった。

「良い名だな？」とニヤニヤしながら言った。
バカにすると、セラフィは席を立った。

「それでは私はこれで失礼させていただきます。おいしいご飯をありがとうございました」

玲奈に礼を言うと、出口へと向かった　の前に、セラフィはもう一度辰巳を見て、

「たっちゃん……くッ！」

笑いやがった。

そして、今度はちゃんと出て行こうとするセラフィ。急に足を止めた。

「（いかん、ついご飯を戴いたからといって、あの情報だけは知られてはまずい）」

小声でゴニョゴニョ言っているため、辰巳たちには聞こえなかった。

「すまぬが二方に礼がしたいんで、少しおでこをこちらに出してくれませんか？」

お礼、という単語で辰巳は少しい気になって、つつい差し出してしまふ。

セラフィは近づくと、おでこに手をかざした。

刹那。

「な　ッ!？」

グラリと辰巳の体が揺らめいた。だんだん意識が薄くなっていく。

(一体何が　?)

そして、辰巳の意識は・・・・・・消えた。

少女のもとへ

「・・・・・・・・！！」

辰巳は意識を取り戻した。

何も覚えていない。ただ平穏な風景が目の前には広がっていた。それでもなぜか辰巳の中にはモヤモヤとした違和感が残っていた。（そっぴいあ学校行かなきゃ・・・・・・・・）

そんな違和感もいず知れず、辰巳はそのことは置いて、学校へと足を運び始めた。

学校に着いた辰巳は教室に入った。

室内は生徒たちが忙しく朝のホームルームの支度をしていて騒がしかった。

辰巳は自分の席へと向かった。席は窓際にあつた。

席に着くと後ろから声がかかった。

「なあ、お前にしちやあ珍しいな、ホームルームの直前に学校に着くなんてさあ」

声をかけてきたのは幼稚園からの付き合いがある友人の葛野だった。なんだかモテたい年頃らしく、髪型を週刊誌のイケメンモデルのようにセットしてきている。毎日それで登校してきているのだが、その効果は未だに表れない。

「ああ、そっぴいああそうだな。まあこんな日もあるさ」

今は春だというのに結構な暑さに見舞われている足軽市。辰巳は暑さを隠しきれず、ネクタイを緩め、ボタンを外した。

「そっか、ならいいな」

そう言つと、葛野は机に開いていた教科書とノートに視線を落とした。まあ真面目な面もあるらしい。

話も終わり、辰巳は急いでホームルームの準備を始めた。すると「あー無理。絶対無理！ 辰巳、お前の貸してくれ」と後ろから救

援要請。

「てかお前、まだその宿題終わらしてなかったのかよ！」

訂正しよう。どうやら真面目ではなさそうだ。

「ったく、仕方ねーな。代わりにジューズ一本。それで貸してやる」
交換条件を出して、宿題を手渡した。

「サンキュー」

まったく、と言いつつ、辰巳は準備を再開した。

それにしても、まだ登校前の違和感が残っていた。自分でも分からない。それが辰巳の頭にこべりついていた。

「やっぱ分かんねーな」

独り言を言つたつもりが、後ろにいる葛野に聞こえた。

「ん？ 分かんねー問題でもあんのか？ 理科だけなら教えられるぞ。お前は中一の頃から理科だけは理解しきれてねーみてーだからな」

ニヤニヤしながら言ってくる葛野を辰巳は軽くあしらった。

「ちげーよ。ただ、なんか気になっちまってよ」

「なんだなんだ？ ついに恋愛から無縁だったお前が気になる女の子でも出来たか？ そうかそうか、お前も隅におけねーな。で、誰だ？ やっぱ委員長の暎理か？ 巨乳派なのか？ それとも」

鈍い音と共に 葛野の声が途切れた。葛野は机に蹲っていた。

「痛えなオイ！ 殴ることはねーだろ！ だいたい、そんなんだからお前はモテねーんだよ」

痛みをこらえて、葛野は言った。

余計なことを言われた辰巳は、少し頭に血が上った。

「うつせー。そんなこと言ってるお前だってどうなんだよ。なんだかこの頃週刊誌のイケメンモデルの真似してきやがつてよ。それでもモテねーだろ？ それよりか昔より悪化してねーか？」

「な、なんだとおおお！？ 貴様、言っではいけないことを俺に言つたぞ！ それに、そんなことはない！ だって俺、この間女子に話しかけられたもん！ だからそんなの」

「それ、ただからかわれただけじゃないの？ どうせ『三年の葛野さんですか？ キーあれが噂の』って感じの」

「なぜ分かった！？ だけど、じゃあなんなんだよ、あの噂って」

「そりゃあお前、春休み明けからその髪型だろ？ それって、春休みデビュリー的なやつのは、意味じゃねーの？」

「なんだよ！ 『あの噂の』ってかっこいいからじゃないの！？」

だんだん涙目になってきている葛野。しかし辰巳はそれでも話をやめなかった。

「それに、ちよつと髪型を変えたくらいじゃモテねーつつの。まず、お前のファッションセンスについてだ。それ絶対週刊誌みて決めるだろ？」

「なんで分かったんだ？」

「なあに、簡単なことだ。」お前は春休み明けからやけにブランド物にこだわってるよな。まあその延長線上として考えたら、やっぱりいつもお前が休日着ている服が、週刊誌に載っているものだと考えてしまう。それに、お前が着ている服、なんかよくどつかで見たことあるなー、と思うんだよ。そして、服がかっこよくても、服とお前が合っていない。そういうことだ」

「そんな」

さらに涙目になってきた。なんだか同情してしまう。

それでも葛野は士気を振り絞って机にうずくめた顔を上げた。

「畜生！ そんな話信じてたまるか！ この野郎！ 俺に嘘を言ってるんだな！」

葛野の表情は悔しいの臨界点を越えていた。

「なんだと！？ 本当のことを言っただけだ！ 嘘なんついてねーよ」

それに辰巳も噛みついた。

そのせいか、辰巳と葛野の顔の距離が異常に近かった。すでに鼻と鼻が触れあっている。

その時。

「おい、ホームルーム始めるぞー。皆席につけー」

ドアから入ってきたのは担任の磯部だった。顔は便りのない型を持っているが、胸部の筋肉は、ワイシャツの上からでも厚さを持っているのが視認出来てしまうくらいに分厚い。それに、上腕二頭筋も半袖になるとよく分かるのだが、小山のようにモツコリとしていた。服装はスーツ姿なのだが、その中身はすでに人造人間並みなのだ。

この磯部には、複数の恐ろしき噂があった。十五歳の時に、レスリングの日本代表に選ばれたとか、とある日本一の山の中で、日熊と対決して勝利したとかetc・・・このような噂があった。よく辰巳たちも生徒指導室に県内でも有数な不良を腕で吊り下げながら連合されていく姿をよく見かけるものだった。

入ってきた磯部は、やけに騒がしいところを睨み付けると、

「おい、多田野と葛野。静にせんか、もう始めるぞ」

二人は磯部がいることに気が付くと、瞬時に言い争いを止めた。

磯部は注意し終えると、名簿を教卓の上に置き、

「じゃあ今日は全校集会が朝にある。このホームルームが終わったらずちに廊下にならんで講堂に行くように。これだけだ」

タイミングよく、委員長の暎理千智が号令を出した。長い黒髪に、顔はパット見ただけ当分は忘れることが出来ないような明るい顔立ちを持っていた。なんだか告白が後を絶たなく、すべて断っているらしい。まさに難攻不落の城だった。葛野もその犠牲者の一人だった。

磯部に言われた通りホームルームの後は廊下に並び、出発した。

講堂は校舎を一回出て、連絡通路的なものを通った先にあった。

一年から三年の順に手前の方に座っていった。

常に置かれている木製のイスに腰を下ろした辰巳は、夜のうちに多少は冷やされたイスの温度に快楽を覚えた。

ここは創設以来一度も手を加えていないのが我が校の自慢じゃ、

と語っていた六十代の校長を思い出しながら、思った。

（なにが『創設以来一度も手を加えていないのが我が校の自慢じゃ』だ。壊れたらおしまいじゃねーか）

その言葉にも一理あり、この講堂の至るところにヒビが走っていた。

愚痴を言っていると、集会が始まった。

前方にある少し高めの壇上に一人の老人が登ってきた。校長だろう。

だいたい、こういう集会はつまらない上に催眠術でも使っているんじゃないかと思わせるほどの眠気を誘う校長の話に始まる。それからかつたるい校歌を歌って終わりというところだろう。ここ足輕中学校もそうだった。

ボーと過ごしているうちに、集会は終わった。

担当の教師が号令を出すと、みな一斉に立ち上がり礼をした。

「はあ、やっと終わったぜ。暇で仕方ねーや」

列を離れ、前にいる葛野のところへ行った辰巳に、葛野は、

「ん？ まあそうだけど、暇じゃない集会があつたら是非いつてみたものだよ」

ごもつともな意見が出され、二人は微笑を浮かべた。

辰巳は授業中であるということを忘れ、窓の外にいる下校中の後輩たちを見下ろしていた。

辰巳たち三年は今から約一年後には受験が待っている。そのためか、後輩たちは十時ほどに下校が許可されたのに辰巳たちは午前いつぱいは授業を受けるはめになっていた。

部活今日は休みらしい。下校している生徒の数がやけに多いことから推測された。

（つたく、受験なんてなかったら俺らだって帰れたのによ。なんだって午前中いつぱい勉強しなきゃなんねーんだ）

溜め息をしながら適当に授業をさぼっていた。黒板には今もなお

数式が書き込まれていた。

ボーと過ごしていると、声がかかった。

「これ多田野。私の授業より下校中の生徒を見ているほうが楽しいか？ お前ら三年はもうすぐ受験だろう？ 集中せんか」

ベシベシ、と手に持っていた教科書を使って、声の主である数学教師である柴原が説教をしてきた。

「センサー」

立ち去っていく柴原に、辰巳は声をかけた。

「なんだ多田野」

「なんで勉強なんてあるんでしょうね」

「そりゃあ社会に出たら必用だからだろう。ま、お前も大人になれば分かるさ」

質問も終わり、再び立ち去ろうとしていく柴原。

「センサー、俺はもう電車は大人料金です」

教室中が笑いで埋まった。

「あのな多田野。私が言いたかったのはだな」

「あーオツケーです。すいません」

まったく、と柴原は言い残し、授業に戻った。

その後というものの、やはり、授業には集中できなかった。それは、違和感も少なくは関わっているだろう。

その違和感が残ったまま、学校は終了した。

帰り際、葛野が「カラオケ行こうぜー」と誘ってきたものの、辰巳はそれを断り学校を後にした。

帰宅した辰巳には課題が待ち受けていた。
買い物だった。

そんなの午前中にいくらでも行く時間があつたらう、と反撃した辰巳であったが、「ごめんっ、忘れてた！ 私はご飯の下ごしらえするのに時間かかるから買い出し行ってきた」と手を会わせられたので、仕方なく引き受けてしまった。

「まったく仕方ねーな」

頭を掻きながら、辰巳は気を取り戻して買い物に行くことにした。ここ一帯にはスーパーというものがなかった。あるとしても車で約三十分。これからいくにしても往復で一時間。さらには買い物の時間を含めたらもつとかかるだろう。代わりに、近くには商店街があった。

辰巳は買い出しの品が書かれた紙を片手に、買い物を開始した。

「えーと、人参じゃがいも、玉ねぎか。それにウコン、コエンドロ、こしょう、しょうが、唐辛子。……？ コエンドロ？ なんだじゃそりゃ聞いたことねーぞ。一体何に使うのやら」

せつかく途中まで完成していた昼食のメニューが瓦解した。

「分かんだけ買えばいいか」

そう結論付けた辰巳は買い物再開した。

その時だった。視界の隅にふと、目に留まる色の髪を持った少女が目に見えた。それは、金塊を連想させる金髪を持った少女。それに、ちらつとだが、服も見えた。なんだか際どい甲冑のようなものを身に付けていた。それでも回りにいる人たちからは目を向けられていなかった。それよりか、その存在事態が存在しないかのような気もした。

辰巳はすぐにそちらを見た。始めて見るような気分はしなかった。一回どこかで会った、もしくは会話した気がした。

今までの辰巳なら可愛い、と思っただけで終わりだろう。だが今はなぜか既視感があった。足を無意識のうちに動かしていた。その、見とれてしまうくらいの美貌を備えた髪を持つ少女の元へと。

あの少女こそ、朝の違和感の謎を握る鍵だと、そう本能が叫んでいた。

異常

セラファイナ・ヴァルキリーは町の商店街を歩いていた。

辺りは昼時のためか、人の数が一段と多かった。

セラファイは少し顔をしかめると、

（ここにはいないだろう。一体どこにいるというのだ。世界のほとんどは英国騎士団によって搜索は行われたはずだ。そもそも、その組織の全貌すら掴めていないのに、探す必要などあるのか？）

その組織とは朝セラファイが言っていた、今英国騎士団が騒いでいるという組織のことだろう。

（にしても……）

セラファイは自らの服装を見た。

全身が漆黒色の甲冑で覆われている。　　といっても、それは隙間なくというわけではなかった。胸、腕、腰、脚といった最優先して守らなければいけないような箇所には甲冑が装備されてはいなかった。頭は戦闘の際、邪魔になるから着けていないのだろう。肌は甲冑の総面積が狭いため、肌が露出していた。視線を服に向けたのはこのことが気になったのだろう。

（ここにもいないなら長居は無用、か。でもやはり、『無色の掛布』スケルトンカーテンを発動させているとはいえ、恥ずかしいな）

言葉から察するに、その『無色の掛布』スケルトンカーテンとは、外部からの視線をというより、自分の体事態を見えなくするという魔法だろう。

そのため、すぐ横を人が通ってもまったく気付かれない。

さてと、と言いセラファイは足を動かし始めた。

その時。

突如と圧倒的魔力がセラファイの体を包み込んだ。

吐き気がしてきそうなくらいに圧倒的な魔力量。これは、この魔力を放った人間の實力に比例する。

「ッ!？」

進めた足を引いた。

（なんだこの魔力量は。もしかしてこれが組織の人間のものか？
……それなら説明がつかかもしれない。一国に等しい組織から逃げているのだ。このレベルのやつがいたとしても不思議ではない）

冷や汗を滴ながら、セラフィは考える。

（だとするならば、それは確認をしなければならない。英国騎士団という組織に属している以上、その組織目的に沿って行動しなければならぬ）

魔力の威圧気圧されている足に無理矢理力を込めた。なんとか動きそうだった。

セラフィは魔力の発生源と思われる場所へと向かった。

向かった先にあつたのは、路地裏にあつた小さな広場だった。そこは、四方をビルやら八百屋の建物などに囲まれており、日がほとんど差し込まない。そのためか、建物の隙間から流れ込んでくる光が異様に強調されていた。

ビルの壁は少し錆びていた。

セラフィはその壁に密着するように身を忍ばせていた。

（落ちて着けセラフィーナ！ヴァルキリー。見るだけでいいんだ。見たら逃げてもいい。恥じることはないんだ。だから落ち着け）

自分に言い聞かせた。小さな深呼吸をして、広場に目をやった。バレないようにそつと。

建物の隙間からの光が神秘的な雰囲気醸し出しているその空間の中に、一人の女性がいた。女性の容姿は腰まで届いているんじゃないかと思わせるほど長い。色は日本人のような黒髪に、茶髪を織り混ぜた色だった。顔の作りはアジア地域の特有な顔立ちだったが、どこか欧米の雰囲気を感じさせられた。服装は、頭には紫色の尖り帽子を被っている。魔女が被っていそうなやつだった。上からはマントらしきものを羽織っている。そのため、それ以外の服が確認で

きなかった。

手にはケータイが握られていて、視線はそちらを向いていた。
セラフィもその服装に疑念を隠せなかった。

（なんだあの服装は？ あれが例の組織のリーダーだというのは？
そう思っていると、

「やつと来たのね。まったく、お姉さんをこんなところで待たせる
なんて、女性を殺す気？ もうそろそろ夏。紫外線は女性の天敵な
んだから」

突如、女性の口が動いた。

「いるのは分かっているわ。ほら、その物陰に隠れている人」
視線が、こちらを向いた。

（バレている？ バカな、そんなはずはない。私は今、『無色の掛
布』^{スケルトンカーテン}を発動させているのだぞ。なのに）

考えていると、女性のほうからまた声がかかった。

「バレてないと思っっているでしょう。でも多分それ、なんつったけ
？ ……、そうそう『無色の掛布』^{スケルトンカーテン}ね。それはね、魔力を

全身に覆わせて発動させている術だから、わたしみたいに、魔力自
体を感じできる人には意味がないのよ。だから、ね？」

女性の髪が微かに吹いた風によって靡いた。

（分かっているなら仕方がないか）

覚悟を決め、セラフィは術を解いてから物陰を出た。

それに気付いた女性は、

「あら、随分と若いのね。わたしがこれまで見てきた中では上のほ
うよ」

「それはどうも。でも、あなたとて見た目に負けず若い方なのは
？ それと、あなたは『暗黒組織』^{ダークマター}のリーダーとでも？」

女性は顔をしかめた。

「『暗黒組織』^{ダークマター}？」

「失礼。私は英国騎士団に所属しているセラフィナーヴァルキリ
—というものです。『暗黒組織』^{ダークマター}とはこの頃唐突に存在を露にさせ

たであろう組織の私たちなりに付けた名称です」

説明が終わると、女性はぱつと顔を明るくした。

「ああ！ あの組織ね。確かに、英国騎士団が手こずっているとか聞いたわね。安心して、別にわたしは『暗黒組織』^{ダークマター}のリーダーなんてもものじゃあないから」

女性は近くに立て掛けてあつた箒を持つてくると、

「そうね、ただ自己紹介するだけなら簡単だけど、それじゃつままないわ。ではここで質問」

女性は腰をうねらせセクシーポーズ。紫色のマントに隠されていた服の間から見えた胸が強調された。でかかった。

セラフィは自分の胸に視線を落とした。

「……、ない。まな板状態だった。可愛そうに。」

女性はそんなことなど知らずに続けた。

「わたしはどここの誰でしょーか？ ほらほらなんでもいいから早く答えてっ！」

「一般人でないのは分かるが」

それから数分考えたものの、女性のほうから答えた。

「ブブー時間切れー。正解は」

ごく、とセラフィは生唾を飲み込んだ。

「『^{セブンシスターズ}七人の魔女』のうちの一人、ジョージ・ライリー・スコットでしたー。ライリーって呼んでね」

「ッー！」

セラフィは息を飲んだ。思わず一步下がった。

ライリーの言っていた組織の勢力図は、英国騎士団にはわずかに及ばないものの、ほぼ同等といつていくくらいの勢力を誇っていた。それは大勢によってではない。組織名にもあつた『七人の魔女』。この七人によって構成されている。わずか七人で一国に等しい組織とほぼ同等。それじゃ、一個人の力量を示してさえいるだろう。

そんなやつが一体私になんの用なのだ、と頭の隅で思った。

「そんな驚くことはないわよ。別にわたしはあなたと戦いにきたんじゃないんだから。あなたとじゃ、釣り合わないわ」

その一言の、セラフィは多少の安堵を覚えた。

「どうしても、っていうのならやってあげてもいいけど？」

その言葉に、セラフィはビクツと肩を震わせ、恐る恐る否定した。で、だ。なぜこの大組織の内の一人がセラフィに接触してきたのか。それが疑問だった。

セラフィは英国騎士団内では『候補生^{カデット}』という枠組みに存在する。

それは、英国騎士団での末端　つまり、雑用係りに近い。だから、そんな本来、軽い事件などで実践経験を積んでいるはずのセラフィたちがこの『暗黒組織^{ダークマター}』搜索に駆り出されていること事態、おかしいのだ。したがって、それほどまでに英国騎士団は焦っていると解釈出来る。それだけの時間、英国騎士団を騒がせている『暗黒組織^{ダークマター}』という組織は強力かつ隠密行動に特化しているかもしれないということだ。長年とまでいかないが、短期間であっても、一国に等しい組織から逃げ切れているということはとてもないことなのだ。しかも、今もなお組織に仮の名前を付けているものの、組織は実在するのか、ということ事態怪しくなってきた。そんな中これだった。英国騎士団の末端であるセラフィに巨大勢力の一人、ジョージ・ライリー・スコットが接触してきた。

もしかすると、これを期に、七人の魔女は英国騎士団を潰そうとしているのではないか、とセラフィは考えてしまう。

仮に、そうなってしまったら、大変なことになる。先刻にもいったが、英国騎士団は世界各地に様々なパイプを築き上げている。その影響力は伊達ではない。もしその英国騎士団が潰されてしまったら、世界恐慌など比ではない経済的打撃を受けることになるだろう。「それにしても、英国騎士団はあなたみたいな幼い子まで搜索に駆り出すなんて、切羽詰まってるのね」

ライリーは手に持っている箒をリズムカルに回しながら、近づい

てきた。

「・・・・・・・・！！」

思わず一步後ずさる。

「ちよつと、その反応は酷いんじゃない？ 泣いちゃうわよ？」

ライリーは普通に言っているが、セラフィにとつては正直そんな場合ではなかった。どんなに優しく接してきても、結局は敵、しかも恐ろしいまでの。悠々とした態度でいられるほうがおかしかった。近くまで歩み寄ったライリーは回していた筈の柄のほうを地面に叩き付け、快音を響かせた。

「さて、時間を使いすぎてしまったわね。今から本題に入るわ」
いきなり、真剣な表情になった。

「別にあなたじゃなくてもよかったんだけど、近くにいたからあなたに言うわ」

「何を・・・・・・・・？」

「それを今から言うのよ。焦らないで」
焦るセラフィを片手で押さえる。

一旦、髪を整えたライリーは、その綺麗に真っ直ぐ伸びた髪の毛を少々気にしながら、言った。

「さつきね、といつても数日前なんだけど、仲間から情報が届いたの。で、なんかわたしにこの情報を届ける役を勝手に決められちゃってね。仕方なく来たのよ。どうせ本部なんかに行ったら総攻撃をお見舞いされちゃうでしょ？ だったら、あなたみたいな末端の要員に渡したほうが楽なのよ」

はあ、だから英国騎士団みたいな堅苦しい組織は嫌なのよねー、と溜め息を重くつきながら、愚痴るライリー。

セラフィはその話に食いかかった。

「それで、その情報は？」

やれやれと呆れ返っているライリーにセラフィが終止符を打った。
「ええ、ちよつとしたこと ではないわね。すくなくとも、あなたたちには利益がある情報よ？ その情報を持ち帰ったあなたは間

違いなく出世出来る。どう？ あなたも若いけど、早く上に行きたいんでしょう？ だったら、あげるはこれ。わたしたちが持っていたとしても宝の持ち腐れなもの」

話終わると、ライリーは紫色の奇妙なマントの中に手を入れた。

（まさか武器を　！！）

目の前の相手を完全に信用していないセラフィは咄嗟に腰に装備していた剣に手を運んだ。

「違う違う、違うわよ。武器なんか持ってないわ」

ライリーは照明するために、一度、手を出した。

「あるといつても、この筈だけよ。といつてもこれは空を飛ぶことくらいしか出来ないけどね」

いい終えると、ライリーは再びマントの中に手を入れた。

出てきたのはA4サイズの封筒だった。

「これがさっき言った情報」

風が吹き、セラフィたち髪が中で踊った。

「これが英国騎士団に莫大な価値を持つ情報だと？」

受け取ったセラフィは目の前に巨大勢力の一人がいることを忘れて封筒に視線を落とした。

「そう、あなたも出世したいんでしょ？」

それは、当然だった。誰もが出世したいと思っている。お金を稼いでお金持ちになりたいとか、そんなふうに。これは人間の真理だった。

しかし、セラフィの回答は違った。

「いや、それはなしにしても、受け取っておこう。この組織に加入している以上、目的に沿ってやっていかねばならないからな」

この場の雰囲気には多少は慣れたのだろうか、先程までと比べると声色が柔らかく感じた。

「あら不思議ねえ。英国騎士団のやつらは全員金にしか興味がないのかと思っていたわ」

「それは誤解だな。さすがに皆がそう考えているわけではない。ま、

「いまいとも言い切れないが……」

封筒に落としていた視線をライリーに向けた。

「さすがにそうよね、謝るわ。で、開けないの？ その封筒」

ライリーは箸を持っていない手で、封筒を指差した。

「いや、これはまず本部に提出だろうな。私はあくまで末端の人間。こんな大それた情報を見に通していいのかどうか……」

「いいじゃない。言わなければバレないって、わたしも見えてないんだから。あなたは少し真面目過ぎなのよ。いいからさっさと見ない！」

ライリーは勢いでセラフィの持っていた封筒を破ってしまった。そこから一枚の写真が落ちてきた。セラフィは慌ててそれを拾い、見た。

そこには

イギリス

多田野辰巳は裏路地を少し入ったところにある四方を建物で囲まれた広場にいた。

正確には身を潜めていた。

辺りは昼の光が筋になって広場を照らしていた。

辰巳はあの金髪の少女を追っている内に、朝のことをいろいろと思いつ出した。

（いや、朝のことは思い出した。未だに信じることはできないけど。やっぱりドッキリとかじゃねえんだろうな）

辰巳はさすがにあんな非現実的なことをすんなりと受け入れることは出来なかった。

辰巳は身を潜めている建物から少しだけ顔を出し、広場の様子を伺った。

そこには二つの人影が見えた。一人は知っていた。朝、辰巳を奇怪な術で攻撃したあの少女だった。

もう一人は

（なんだ？ コスプレ・・・？ やっぱなんかの番組のドッキリだったんじゃないか？ 尖り帽子にマントって、いつの時代だよ。でも、機材とかが見当たらねえな。仮に、これが番組の撮影だったとしたら、なんでこんなところにいるんだ？ ロケバスでいいのに。それに、人が少ない。出払っているって考えてもやっぱり機材とかがねえから番組っていう線はなしか。だったら、あれはあの二人の嫌がらせだったのか？ 後ろの方からなんらかしらの方法でCGを作って脅かした。くそ！ やっぱあいつらのいたずらか）

少し苛立ち、思わず壁に拳を叩き付けた。ゴツという鈍い音が広場に微かに響いた。けっしてあちらに聞かれてもおかしくない大きさだった。

まず、最初に気が付いたのは尖り帽子を被っているお姉さん風の

女性だった。帽子から出ている髪が、優雅に風で舞っていた。

女性はこちらに気が付くと、すぐ目の前にいる少女　確か名はセラフィ。セラフィに話しかけた。

（・・・・・・！　やっちゃった。なんてことをやらかしまったんだ俺は！）

この後の被害妄想を考えたら全身から嫌な汗がブワツ、と吹き出した。嫌な感覚だった。

話しかけられたセラフィは言われるやいなや、こちらに気付くと歩み寄ってきた。その表情は険しい。

辰巳はしぶしぶ物陰から出ることに。大いに怖かった。

セラフィは辰巳の目の前まえまで近づくと、

「なぜ貴様がここにいる」

威圧感を感じさせる声で言った。

漆黒色の甲冑を全身に際どく装備している少女の表情は真剣そのものだった。

その問いに辰巳は恐れながらも答えた。

「なぜって、そんなの着いてきたからに決まってるんだろ」

当たり前で、この問いにマッチする解答だったが、セラフィの顔の険しさは消えなかった。

「そうではない。私は確かに『無色の掛布』スケルトンカーテンを発動させていたはずだ。にもかかわらず着いてきただと？　ふざけるな。しかも、なぜ朝消したはずの記憶が戻っているのだ？」

セラフィはいきなり辰巳の胸ぐらを掴んだ。

「し、知らねえよそんなこと。第一、それ以外の理由なんてあるわけねえだろ！　記憶については朝から違和感があって、疑問に思っていたけどよ、さっきお前を見つけた途端、思い出したんだよ、朝の記憶が」

辰巳は胸ぐらを掴まれた状態のまま、冷静に説明をした。セラフィは納得できていない表情のまま、

「そんなはず、あるわけが」

少し迷った後、助け船を求めたようで、胸ぐらを掴みながら辺りに視線を泳がした。

「ライリー、ちょっとこっちに来てくれ」

言うと、セラフィは辰巳を掴んでいた華奢な腕を下ろすと、ライリーと呼ばれた女性を見、こちらに呼んだ。

「何？ あつちで聞こえることだけのことは聞いていたけど、つまりどういうこと？」

ライリーは静かに、そして優雅に歩きながら、箒を片手でテンポよく回していた。

「いや、大それたこと ではないのだが、少し引つかかってな」

「そう。確か、なんで着いてこれたんだ、ってところよね。でも、記憶に関しては分からないわ。もし、記憶を消したらその、消されたということさえ忘れてしまうもの。だったら、記憶のほうは掛け忘れたんじゃない？」

「そんなことはない。しっかりとやったはずだ」

「だ、か、ら」

ライリーは念を押すように、

「そのこと事態掛け忘れてるんじゃないかって言ってるのよ」

「……でも、そうであったとしても、着いてきたということはどう説明をすればいい？ だって、あなただって私が『無色の掛布』スケルトンカーテンを発動させていた、ということには気付いていたのだから？」

「そうね、確かにあなたはその時その魔法を発動させていたわ。わたしにはお手上げね」

ライリーは本当に困っている表情した。

「それはそうとして、巨大勢力の一人であるあなたがそんな結論でいいのか？」

首を傾げながら、セラフィは尋ねた。

「いいのよ、別に。あんな組織、強ければ入れるんだから」

セラフィとライリー。この二人は辰巳のことなど目もくれずに何か

を話し合っていた。当然、辰巳はその内容がどうということなのかも知ってはいない。

辰巳は思いきって二人に声をかけた。

「さっきからなんの話をしてんだよ」

すると、ライリーが話を止め、こちらに視線を投げてきた。

「ふーん、本当に分からないの？ あなたのことにについてよ」

「何で俺なんだよ」

「何でって、貴様が着いてきたからだ。惚けるのもいい加減にしろ」
今度はセラフィだった。

辰巳は本当に何をしてしまったのか知らなかった。ふざけてもいなかった。ただ、自分は着いてきたただけだ、と自己主張をするだけだった。

しかしセラフィは辰巳に対する問いかけを止めなかった。

「だから、なぜ貴様は私に着いてくることが出来た？ 私はその時、見えなくなる魔法を展開させていたんだ。着いてくるなんてことは不可能のはずだ。それなのに、貴様はここにいる？」

「だから、さっきも言っただろ、着いてきたただけだって。それ以外に何かあんのかよ」

その発言にセラフィはカッとした。

「惚けるのもいい加減にしろ！」

感情に負け、セラフィはもう一度辰巳の胸ぐらを掴んだ。今度はビルの壁まで寄せていき、叩き付けた。

ゴツ、という鈍い感触が辰巳を襲った。

「ッ！ 何、すんだよいきなり」

その言葉も聞かずに、セラフィは片方の腕を振り上げ、それを辰巳めがけて振り下ろした。

辰巳は思わず目を瞑った。

「覚悟しろ！」

セラフィの叫びが耳に飛び込んできた。
しかし、覚悟しろもくそもなかった。

痛みがなかった。

不思議なことに数秒が過ぎた今でさえ、何も起きなかった。まるで、時間が止まっているような感覚だった。

辰巳は畏怖しながらも目を開けた。

そこにはセラフィの小さな拳があった。しかしよく見てみると、それはセラフィが故意に止めたものではなかった。奥にいたはずのライリーがいつの間にかセラフィが振り下ろした腕を掴んでいた。(助かったのか……?)

敵か味方が、ましてはそんなことも関係がない人間が助けた。少しは疑問に思った辰巳であったが、まずは助かったという紛れもない事実にあづけた。

「駄目でしょう、そんな暴力を一般人に加えちゃあ。英国騎士団はいつたい何を教えているのかしら」

掴んだ腕を離さず、微笑を浮かべて話しているライリー。その口調に辰巳は恐怖を覚えた。

「な………!! 離せ!!」

セラフィが掴まれた腕を思いきって横に振った。

ライリーはそれを後ろへ飛び、避けた。

「つと。荒いわねえ。若さが表に出ちゃっているわよ?」

余裕の笑みを浮かべる。

「………」

セラフィは反省した趣を見せ、

「………、すまない、つい頭に血が上ってしまった」

と言うと、軽く頭を下げた。

「分かればよろしい」

よほど気に召したのか、ライリーは胸を張った。

そこで、孤立感を感じた辰巳は啞然として見ていること以外何も出来なかった。

セラフィに掴まれた腕は離されたものの、まだ多少激闘時に表れた痛みは消えてはいなかった。正直、辰巳にとっては何がなんだか

理解不能な状況だった。

「……………」

黙って立ち尽くしていると、セラフィが冷静さを取り戻した顔色で、また尋ねた。

「本当にただ、着いてきたただけなんだろうな？」

先刻、壁に押し付けられたとき、圧倒的な力だった。この細く伸びる華奢な腕からは連想できないほどの力だった。そのことに恐れながらも答える。

「そ、そうだ」

「ふーん、理由が分からないわ。わたしは一応確認したんだもんね」
ライリーは首を傾げながら考える。

「やっぱ分からないわ。まあいじゃない、気にしないで」
考えるのを止めたライリーの表情は清々しかった。

それに対し、セラフィは顎に手を当てながら考えていた。

これを見たライリーは近づき、肩を叩いた。

「だからもういいじゃない。気にしないでいいのよ。わたしだって何百年も生きて」

「何百年？」

それに、辰巳とセラフィは反応した。

「あ、いやだから気にしなくていいって言ってるのよ！　じゃあねっ！」

言うやいなや、すぐに二人から距離を取り、手を振った。

「バイバイ」

刹那、ライリーの姿は虚空に消えた。

何もない。目の前をトラックが通りすぎたわけでもないのに、ライリーはそこから消えた。

辰巳が瞬きしたときにはいなかった。

ライリーが去った後、広場には静寂が訪れた。

「……………行っただか」

静寂を破るように、セラフィは言った。

セラフィの顔には驚きがなかった。

「ちょ、おい！ 何がどうなっているんだよ！」
頭が混乱する。

それをセラフィは一言で静止させた。

「落ち着け。私はまず英国騎士団に連絡を取る。だから少しは黙っている」

冷静沈着。まさにこの言葉がぴったり合う雰囲気セラフィは出していた。

しかし辰巳はそんなことお構いなしに、

「これが落ち着いていられるか！ お前らなんなんだよ！ さつきからセブンなんとか英国騎士団とか、なんのことなんだよ！ ふざけんのもいい加減にしろよ！」

これを聞いたセラフィはケータイをどこからとなく取り出すと、手を止めて言った。

「ふざけている？ ふん、何をバカなことを。私はいたって真面目だ。それより、一般人ごときがこのことを知ってしまったことがふざけている」

セラフィはケータイの電源を入れた。

待つこと数秒。セラフィはケータイを操作し、電話を掛けた。

二、三回のコール音の後に、誰かが応答した。

「はい、こちらイギリス大使館ですが」

「至急英国騎士団本部に連絡を取って欲しいのですが」

「・・・・・・、分かりました。では、ナンバーを教えてください」
それにセラフィは答えた。

どうやら英国騎士団への連絡は直接は出来ないらしい。

「それで、要件は」

「キッシン先生への連絡をお願いしたいのですが　そうです。あのハゲです」

（おいおい、先生のことをハゲなんていっていいのかよ）

「そうですか。じゃあ重要資料を入手したとだけお伝えください」

耳からケータイを離すと、十数秒の空白が出来た。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・。

「ということだ」

「は？ なんのこと？」

キョトンとしてしまう。

こんなこと言われて理解できるわけがない。

セラフィは呆れたように、

「なんだ貴様、読心術も使えんのか。まったく、困ったやつだな」

いやおや使えないのが普通なんです、と心の中で辰巳も別の意味で呆れる。

セラフィは心の中で呆れ返っている辰巳に読心術についての説明を始めた。

「読心術とは相手の心を読むという簡単なことだぞ。なぜ分からんけしからんな、と付け足した。

そして続ける。

「では、行くぞ」

「？ 行くつて、どこにだよ」

唐突の話題変更で辰巳は戸惑う。

セラフィは気にせずに、

「決まっているだろう」

当たり前のような口調で、

「イギリスに」

一瞬、辰巳の頭の中は白になった。

「はあ！？ なに冗談言ってんだよ」

最初は冗談、ということが前提だった。だがしかし、セラフィの顔を見ている内に、

「冗談……だよね？」

不安になってきた。

セラフィは何も答えなかった。それがさらに辰巳の心を揺さぶった。

「冗談なんだろう！？　だったら俺は帰るぞ。買い物も済ませなくなんねーし。こんな冗談に付き合っている暇なんてねーんだよ」

「冗談ではない！」

セラフィは立ち去ろうと背を向けた辰巳の襟首に手を掛けた。うめき声と共に、辰巳の足も止まった。

「冗談でもないし下らんことでもない！　私には貴様を英国騎士団本部へと連れていかなければならない義務があるのだ！」

「痛っ、何すんだよ！　てかよ、そっちの方が個人的事情じゃねえかよ、そんな勝手に決められた義務で俺はイギリスなんつー遠い異国の地へ連れていかれかけていたのか！？」

「冗談じゃない、と辰巳は吐き捨てるように言った。

「ええい！　いいから来いと言っているのが分からないのか！　これは重

要なことなんだぞ！」

「どこが重要なことなんだよ！　それはただの誘拐犯じゃねえか！」

「ええい、くだらんことでいちいち告げ口しておつて。いいから貴様は私に黙って着いてくればいいんだ！」

「なんだとコラア！　こちとら急いでんだよ！　これから昼食だよ？

ご飯、ご飯なんだよ！　人間食べ物を食べていかなきゃ生きていけないんだよ？　それぐらいは理解していただけましたか！？　それとも、この理由に見合う理由でもあるのか？」

買い物バッグを揺らしながら辰巳は熱弁した。

セラフィもその熱気に押され、思わず引き下がってしまう。

「ねえなら帰らせてもらっぞ」

辰巳は再び商店街の表通りへと足を運び始めた。

考える。このままあの少年を帰らせないための理由を。

（このまま帰らせていいのか？ 私は確かに連れていくと言った。だったらこんなに簡単に帰らせてしまっているのか？ いいや、いいわけがない！ 考える、セラフィーナ・ヴァルキリー！ 必ずいい案があるはずだ。だから、考える！）

必死に考えるも、そう簡単には思い付きはしなかった。

あの少年はもうこの広場を出ようとしている。この広場から出てしまえば商店街の表通りだ。時は昼時で通りは人の波と化しているに違いなかった。そうなってしまうえば少年に声が届くことはなくなってしまう。

だったら、今しか機会はない。

（このままでは ツー！）

その時だった。ふと、頭の中にある場面が写し出された。

それは、ここ日本に来る時、飛行機内の座席に備え付けられていた小型テレビで放送されていた恋愛ドラマの一部始終だった。

（これしか）

激しく波打つ心を沈めて、セラフィは言った。

もう時間はない。刻一刻を争う時間だ。

そして

「そんなの決まっているだろう！ 貴様が好きだからだ！！」

少年の足は止まった。

（！？ なんだよこの急な展開は！！ 俺はギャルゲーの主人公ですか！？ んなわけあるか！）

あながち間違っただけじゃなかった。辰巳、君は小説の主人公だ。

そして、辰巳は突然の出来事に驚き、足をその場に止めていた。足に力を入れようとするにだが、力がうまく入らなかった。

その代わりに、脳内にはある言葉がこだましていた。

『貴様が好きだからだ!!』

辰巳は生まれて始めて告白というイベントを経験した。

仕方なく、辰巳は振り向いた。

そこには顔を赤くした金髪の少女セラフィがいた。今も少し顔を俯かせている。それでも、耳が赤いことからそう推測出来る。

辰巳は戸惑った。

いったいどうしたものかと。

悩む。悩んだ末の結論は

「本当に………?」

尋ねた。自分の耳を疑っているのだろう。

その質問に、セラフィはこくりと頷いた。

「そうか」

もう忘れていた。昼食のこと、玲奈のことも。今一番大切だ、と言いつけていた持論をすべてのこと忘れていた。

辰巳は天を仰いだ。そこには晴れ晴れとして雲一つない快晴があった。そう、辰巳の心のように。

「じゃあ………行くよ」

肯定すると、セラフィはこちらに近づいてきて、

「来てくれるのか!」

目を輝かせながら辰巳の手を握った。温かい感触が手を通して伝わってきた。

思わず手に持っていた買い物バッグを落としてしまった。

かくして、辰巳のイギリスに行きが決定した。

空港 零番ゲート

訳もわからずその場の雰囲気でこの国際空港に来てしまった辰巳。
「どこだよ、ここ……」

恐怖でいっぱいだった。

何度かこの空港は利用したことはあった。海外旅行等に行っただけだ。通常、このような空港にはゲートがあり、そこで荷物検査をする場所でもあるだろう。だが、ここ 辰巳たちがいる場所にはそんなものは存在しなかった。その前に、人の気配すらしない。

闇が支配する廊下をセラフィが先導し、歩いていた。

どうやら、どこかで着替えたらしく、セラフィの服装が変わっていた。ジーンズの生地を基調としたジージャンに、その下は英語のロゴが入ったピンクのＴシャツ。下は膝上まであるスカートだった。そして、静寂を破るようにセラフィは言った。

「零番ゲート。我々英国騎士団専用のゲートだ。通常ではこの局長クラスのやつでも入ることを許されていない極秘中の極秘。幸運だな貴様は、ここは都市伝説にもなっているんだぞ」

そんなのどうでもいいから、と弱めの反抗をした辰巳であった。そんな会話もすぐに終了し、この長かった廊下の突き当たりまでやって来た。

目の前には暗闇にぽつんと一つだけ扉があった。回りの雰囲気が異様なため、ただの扉であるはずのこれも、不気味さを放っていた。
「行き止まりじゃねえよな？」

声を忍ばせるように辰巳は言った。

「行き止まりではない」

言っと、セラフィはドアノブに手を掛けた。そのまま開けると、目映い光が差し込んでくる。

辰巳は思わず腕で目をかばった。

今まで暗闇にいたせい、少し目を開けることが出来なかった。

それでも、なんとか辰巳は目を無理矢理開き、目の前を確認した。
「ここは・・・・・・？」

そこから確認出来たのは、ガラス越しに見える広大な空間だった。辰巳たちがいると思われる場所はその広大な空間を見渡せる位置にあるバルコニーのような所だった。

視線を横にそらすと、ソファーなど、待ち合い室を思わせる作りをしている部屋があった。そこには十数人のひとがいた。その内の半分からいの人たちはなぜか緊張しきった顔色だった。

「間に合ったか」

セラフィは一言言くと、近くのソファーに腰を落とした。

「お、おい・・・・・・」

見ず知らずの場所で、戸惑った。辰巳はセラフィの隣に腰を落ち着かせた。

そして尋ねる。

「なんだよここ」

「なんだって、ここは零番ゲートだと先程説明したばかりだろう。もう忘れたのか？ それに、ほら」

セラフィはガラス越しに見える広大な空間の下を指差した。

そこにはメンテナンス中の飛行機があった。

「そうじゃなくて、なんだってこんなものがここにあるかって聞いているんだよ」

「ああ、そういうことか。場所は空港があったからだろう。英国騎士団は世界中とパイプを持っている。やろうと思えばこんな空港にこういったものを造ることなど、造作もないことだ」

なんだか実感がわかなかった。いきなりこんなことになって、イギリス行きが決まった。その場のノリで来てしまったことを後悔している。それに、後悔していなかったとしても、心の整理がまだだった。

「・・・・・・」

辰巳は暫時黙り、考えた。

（これって本当に現実か？ 夢だったりしねえだろうな。いや、そうであって欲しい。さっきはその 場の雰囲気で決めちまつたが、後々になってバカみたいになってきた）

はあ、と溜め息を漏らした。

「なんだ、溜め息か？ 寿命が三秒縮まるぞ」

どうでもいいですよ、と辰巳は力なく答えた。

その後は特にやることはなかった。

しばらくし、飛行機を見下ろしているときのことだった。

辰巳は唐突に生理的現象を覚え始めた。

「どうしたんだ？ そんなにモジモジしよって」

「トイレ行きたい……………」

一度黙りこみ、

「場所が分からねえんだよ」

「それならそこにある階段を下りたところにある」

セラフィは頬を朱色に染めながら言った。

「そ、そうか。変なこと聞いちまって悪かったな」

どうやらセラフィはそっち方面に関してはデリケートらしい。

辰巳は階段を下りた。

その先には広大な空間があった。すぐ側のは飛行機のメンテナンスで使われているだろう機材が数多くあった。

その空間を、辰巳は内股になりながらもトイレを探すために歩き回った。けれど、トイレは見つからない。

首をキョロキョロと振って、トイレを探していると、

「おい、その少年！ こんな所でいったい何をやってんだ？」

不意に、後ろから声をかけられた。反射的に振り向いてしまつて、膀胱に刺激が加わった。

（いかん、相手に我慢していることを悟られては恥だ）

意を決して内股を直した。

後ろにいたのは二十代前半くらいの若い男性だった。髪は作業時

に邪魔にならないようにするためか、スポーツ狩りだった。服は作業服に身を包んでいた。

男性は、困った顔付きになり、
「ったく、ここは立ち入り禁止だ」

単刀直入に言った。

「あれ？ でもトイレは下にあるって……」

「トイレなら上の待ち合い室にあるぞ？」

「え……」

まさかの事態に困惑する辰巳。

「んじゃあの野郎、間違つて俺に教えやがったな！」

セラフィに謝った事実を教えられたことに対する怒りと共に、迫り来るものがあつた。

「その前にトイレ行かねえと！」

再度内股になり、指摘してくれた男性に例を言つと、すぐさま上へと戻つた。

トイレを無事に済ませた辰巳は、セラフィの隣に戻つた。

だが、今さっきの怒りはまだ消えてはいない。

辰巳はからかわれたことに、軽くセラフィに怒りをぶつけた。

「おい、なにがトイレは下にある、だ。もろこの階にあつたじゃねえか。作業員の人に怒られちまつた」

「いやな、まさか本当に行くとは思わなかった。行く途中にあつたのにもかかわらずな。まさにバカとはこのことだ。なかなか面白い絵だったぞ」

フフ、と勘に触るような笑みだった。それでも、その笑顔は辰巳をびくつかせるほど、綺麗なものだった。

こうして、ゆったりとした時間はあつという間に過ぎ去つた。飛行機のメンテナンスが終わつた。すると、数人の人が、動き出した。それを見たセラフィは、

「では、私たちも行こうか」

言い、セラフィはソファから腰を上げた。皆が向かっている方階段へ、足を運んだ。

下りた先は、機材が見当たらなくなり、ただそこにあつたのは広大な空間と、そこぽつんと置かれた飛行機のみだった。

飛行機の側に到着すると、機内への扉は開かれていた。

辰巳たちもおのおの勝手に乗り込んでいつている英国騎士団の要員を見て、乗り込んだ。

中は驚くことに、ファーストクラスと同じくらい　いや、それ以上に豪華絢爛だった。

その風景に数秒、辰巳は啞然とした。

セラフィの呼び声と共に、我を取り戻した。

席は決まっていなかった。その証拠に、誰も座席を確認することなく、空いている席に着いていた。辰巳も同じように座った。隣には髪を短く揃えた金髪の三十代後半ほどの男性がいた。男性は、辰巳を見ると、鋭い眼光を飛ばした。

辰巳はそれを愛想笑いでごまかした。

セラフィは辰巳と通路を挟んだ向こう側に席を決めていた。

他にも十数人の人がこの飛行機に乗り込んでいた。

しばらくたつと、飛行機が離陸準備を完了させていた。飛行機が動き出した。エンジン音が空間内をこだました。すると、目の前の大きな扉らしき扉が、開いた。昼の光が機内に差し込んできた。飛行機が先程まであつたのは倉庫だった。

飛行機はそこを出て、無事、離陸に成功した。

飛行機の中は快適そのものだった。

飲み物はこのフロアの後方にクーヒール、オレンジジュースと種類豊富に備えられており、菓子類も不十分ではないくらいにはあつた。普通のエコノミークラスではこうは行かないだろう。

席のつくりは革シートだった。座席事態もリクライニング式で、前後に操作できる。これなら睡眠に心配はなかった。

現在の時刻は日日本時間において、午後三時半を回ろうとしていた。

隣の男性は、昼間だったというのに、寝てしまった。

「ぐ、があークウー」

こんな感じにだ。

横に座っているセラフィに助け船を求めたが、あっさり振り払われた。それで今もなお、この状況が続いているというわけだ。

すると、奥の 辰巳たちから見て前方から、一人の女性が出てきた。手にはカートが握られており、カートには十数センチほどの長方形をした機内食が積まれていた。

女性はそれを、一人ひとりに手渡していった。辰巳もそれを受け取った。その際に、肉か魚かを聞かれた。辰巳は肉にした。すると、

「では、私はフィッシュ！ お願いします」

日本語で、優雅にしゃべったのは隣にいた金髪の男性だった。

辰巳はビクツ、と肩を震わせたが、飛び上がるほどではなかった。それも収まると、辰巳は座席右方に備え付けられていた簡易テーブルをこちらに寄せ、そこに機内食を置いた。

それから十分と少々。辰巳は食事も終わり、暇になった。

隣にいる男性は、食事が済むと同時に、寝てしまっていた。

ぼーと辺りを見回すと、なんらかしらの違和感が芽生えた。それは、朝感じた違和感とはまったく別のものだった。ただ、偶然と引っ掛かる違和感。しかし、飛行機に乗っている人たちは皆、気付いていないかのように各自娯楽を楽しんでいた。

（そっぴあぁ……）

辰巳はぼんやりと思った。

そう、分かった。

それは 待ち合い室にいったときの人数よりも多い気がした。不安に感じた辰巳は隣にいるセラフィに話しかけた。

「おいセラフィ、なんだか前より人数増えてねーか？ 特に黒い服

を来ているやつら。本当に大丈夫なのか？」

セラフィは聞くと、辺りを軽く見渡した。セラフィの顔には不安そうな表情はなかった。

「なるほど、だいたいのことは理解できた。なに、心配することではない」

言い終えると、セラフィは目を閉じた。

それに辰巳は追求しなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263z/>

ヴァルキリー家の娘事情

2011年12月20日17時46分発行